

特別寄稿：第 40 回日本造血細胞学会総会を開催して

第 40 回日本造血細胞学会総会会長 豊嶋崇徳

第 40 回日本造血細胞移植学会を 2 月 1-3 日、ロイトン札幌、さっぽろ芸文館、札幌市教育文化会館において開催いたしました。本学会の起源は、骨髄移植の黎明期の 1978 年、新進気鋭のパイオニアたちが集い開催された日本骨髄移植臨床懇話会で、今年が 40 回の節目でした。この開催について、実は多くの隠された苦勞と努力がありました。学会総会を開催するとはこういうことだということをぜひ皆さんに知って頂きたく、また記録を後世に残すために筆を執ることとしました。

1. 総会開催が決定するまで

私が北大に着任してまもなく、今回使用した芸文館と教育文化会館が今年限りで取り壊しになることを知りました。その後は札幌で大規模な学会を開催できないというまさかの事実を。北大教授が東京、福岡など他都市で開催しなければならないとは、自分は何のために北大に来たのか、また大変な恥であると思い、まだ総会長に値しない若輩者ではありましたが、最後の札幌開催を訴え立候補いたしました。他の 2 名の立候補者は私よりかなり年輩の方であったにも拘らず、16:2:1 の圧倒的多数の票を頂き、札幌開催を成功させなければならないと胆に銘じた瞬間でした。

本学会総会は、いままではほぼ主催校が主体となって運営してきており、学会事務局にノウハウが蓄積されておらず、過去の履歴の蓄積があるコンベンション会社の寡占状態でした。私は、日本血液学会のプログラム企画委員長として、高いレベルでの学会企画運営を経験してきました。そのノウハウを本学会に伝えようと、岡本真一郎理事長と相談の上、第 40 回総会を今後の学会運営のモデルケースとし、学会事務局機能の強化、透明性と競争原理の高い運営、経年的な企画内容と総会長色の強い単年度企画の融合を目指した総会とすることとしました。まず、学会事務局にもご参加頂き、コンベンション会社のコンペを行い、3 社の中から札幌支社機能の充実しているコングレを選定しました。

その後、大きな問題に直面しました。本学会はその規模からロイトン札幌、芸文館、教育文化会館の 3 会場を必要とします。しかし 3 年前にもかかわらず、先約のため会場が確保できませんでした。公約違反となるため総会長の辞退か、あるいは最悪、九大一内を事務局に、福岡での開催を覚悟しました。コングレ大谷さん（お父さん、と親しまれていたが、名付けたのは私でした）を中心に他団体や札幌市にロビー活動を開始、日程を融通して頂き今回の会期 2 月 1-3 日が確保できたのです。次にクリアしなければならない問題は例年より 1 か月以上早い開催時期でした。そのため総会での学会決算・予算案の承認ができないという問題が起きました。会計事務所など皆さんに御協力頂き、

3月に臨時理事会を開催して頂くことでクリアすることができました。最終的にすべての問題をクリアして札幌開催が決まった瞬間でした。

2. 総会の準備開始へ

次に学会ポスター作製です。医学会というと都市をイメージした男性的なものが定番ですが、固定観念を捨て、“誰がみても冬の北海道とイメージでき明るくわくわくするポスター”をと依頼しました。最初に提示されたのがあの雪だるまで、即断即決で決まりました。通常学会ポスターの決定までは時間がかかるものですが、コングレススタッフがいかにか私の意図をピタリとフォローしてくれたかわかるエピソードです。雪だるまポスターは大変評判がよく、ランチョンの弁当の包装にも使用されました。第40回大会の強烈なイメージとして多くの参加者の心に残り続けるでしょう。

学会のテーマは“未来の造血細胞移植”に決めました。移植医療の現場では様々な職種の医療人が患者さんの小さな変化を見逃すまいと、日々“虫の目”を凝らしています。しかし時には、現場を離れて大空を舞う“鳥の目”で大きく俯瞰してみることも大切です。そうすると今まで見えてこなかったものが見え、新たな視点が創造されます。将来を担う若者に、未来の造血細胞移植の夢をみせたいと、そして造血細胞移植のバトンが世代を超えて永遠に渡されていくことを願い、このテーマを選びました。あとは自然とこのイメージに沿って企画が決まっていきました。

次に学会総会に対する私の考え方をスタッフに伝えました。最近の本学会をみていると、サイエンスというより、協調と調和が重んじられ、個々人やグループの発表会の場になっている感がありました。それはそれで大切ですが、ここでわが国の移植医療が発展してきた歴史を振り返ってみたい。たとえばPBSCT、臍帯血、ミニ移植が海外で開発された時、どうやって日本に導入されたのでしょうか？ただ論文を読むだけではとても無理です。先輩たちが、アメリカの移植学会、当時は開催地のスキーリゾートに因みKeystone Symposiumと呼ばれていました、に参加し、第一人者の発表を生で聞き、会場の熱を肌で感じ、質疑応答からコツを学び、日本に新技術を導入していったのです。このように学会には個々の成果発表の場であるだけでなく、皆が一体となって進歩の階段をワンステップ上がる場であるという重要な使命があります。日本造血細胞移植学会もそういう場であって欲しいと願い、第一会場を総会の中心と位置づけ、今回のテーマである“未来の造血細胞移植”を皆で考える場にしたいと、ASHやASBMTでは当たり前ですが、日本の学会では極めて珍しい3面スクリーンにブルーの照明としました。これも私の意図を汲み取ってくれたコングレススタッフの素晴らしい演出でした。

この第一会場に世界最先端の演者を配したシンポジウムを絶え間なく流しました。大空を悠々と舞う“鳥の目”で移植医療を俯瞰し、未来の移植の

姿と夢を、将来を担う若者たちにみせたい。シンポジウム演者計 18 名のうち 11 名が海外演者であり、また世界をリードできる学会でありたいと願い、必然的に、本学会初めての試みですが、全シンポジウムを英語化しました。その他の一般セッション、教育講演などの編成はプログラム委員と北大スタッフに完全にまかせました。

企業の皆さまも本当に協力して頂きました。私は各学会でプログラム企画に携わってきていますので、今回の企業の皆様の熱気を肌で感じました。ランチョン枠も足りなくなっていて、スイーツ、ブレイクファストセミナー（このネーミングも私たちのアイデアですよ！）を増設して対応しました。とくにランチョン申し込みにもかかわらず朝に移動して頂いた企業さんに集客の面で迷惑かけないようにと、医局員、看護師に動員かけていましたが、何の問題もなくどの会場も沢山来て頂きました。スイーツは空港で買うような北海道銘菓のおしゃれな袋詰めは大変よかったとの声を沢山頂きました。

2017 年 5 月 12 日、いよいよ雪がちらほら舞う雪だるまのホームページを公開しました。これもいままでの学会ホームページの概念を覆し、大変美しいと評判になりました。7 月 20 日、一般演題の募集を開始しました。スタッフは大変心配していましたが、私はあちこちで手応えを感じていたので楽観視していました。9 月 5 日、演題登録を閉めました。664 演題もの応募があり、第 36 回沖縄大会に次ぐ学会史上第 2 位の演題数でした。このあたりからスタッフは不安から自信が芽生えていったのではないのでしょうか。このように演題数も増えたのですから、当然、優れた発表に敬意を表すため、プレナリーセッションを設けることにしました。採点は学会プログラム委員（中央）と総会プログラム委員（北大）で行いました。上位演題に北大からの 2 演題が含まれていたため、中央委員のみで最終投票をお願いしたところ、プレナリー 3 題中 2 題に北大、杉田純一君、山川知宏君が選ばれるという快挙を成し遂げました。当日は皆が襟を正し、次代を担う若者の発表を聞き、エールを送ることができて大変良かったと思います。

また、参加者への心遣いとして、ドレスコードをビジネスカジュアルとし、コートを持ち運べるようにとクローク・バックを準備しました。また荷物が多い中で簡単にプログラムがわかるようにとポケットプログラムも準備しました。多くの方々が利用されているのを見て、スタッフは嬉しい限りだったと思います。また有志の皆さんによる「てしめし編集委員会」が組織され、手作りの札幌グルメ冊子「てしめし」も配布されました。今回、多くの参加者から「細やかな心遣い、手作り感が素晴らしかった」とお褒めの言葉を頂いたのはこのあたりの工夫にあったのだらうと思います。

3. 総会始まる

2月1日、いよいよ総会が始まりました。幸い天候に恵まれ、航空機運航も順調で、海外演者も次々と順調に到着していると連絡が入ってきます。午前中から理事会や認定医面接試験、教育セミナーなどが粛々と進んでいきました。夜はエルムガーデンでの会長招宴です。1年前にコングレと視察し、ここでの企画と飲み物、食事を決めました。まず、庭園に氷で作られた特設のアイス・バーでのウェルカムドリンクを楽しんで頂きました。そして総ガラス張りの大広間で、ライトアップされた美しい雪化粧の庭園を眺めながら、早瀬英子君の司会のもと、会長あいさつ、岡本真一郎会長の祝辞、今村雅寛先生の乾杯と続き、北海道らしいお酒と食事を楽しんで頂きました。皆さん、特に海外演者の方たちには大変喜んで頂き、スタッフ一同は成功の手ごたえを感じ始めたのではないのでしょうか。

4. 2日目

2月2日、曇り時々晴れ。いよいよ学会総会本体の開始です。朝から参加者が受付に続々とつめかけて来ます。会場の入りも良好です。さていよいよ昼には本総会初の企画であるオープニングセレモニーです。あまり周知が出来ておらず学会直前にHPにチラシを張りました。どれだけ参加者があるのかスタッフ一同不安の時でしたが、蓋を開けると想定外の900名弱の参加で満席、立ち見多数でした。山口太鼓流、北海若集太鼓による和太鼓スペシャルパフォーマンス。盛り上がり感動しましたね。そして北大手作りビデオメッセージから、会長挨拶へと続きます。「この学会は、北大血液内科、同門会、コングレ、そして有志の仲間による「チームてっしー」の手作りの学会です。皆さんの一生の思い出となりますよう一生懸命準備しました。ここに第40回日本造血細胞移植学会総会の開会を宣言します。」

そして、これも従来の学会と異なるスタイルの会長シンポジウムへと続きます。日米欧からの3名によるシンポジウムでした。欧米演者2名は前年の米国移植学会での素晴らしい発表を聞いてその場で直接ハンティングしました。期待通りの、未来の造血細胞移植はこうなる、という夢を見せてくれる発表でした。私も日本代表のつもりで自分たちの基礎と臨床データを発表しました。実はこの企画には、日本人でも欧米人に負けない発表ができるのだということを、将来を担う若者にみせたい、自身を持って欲しいという隠れた意図があり、勝負のつもりで臨んだのでした。会長シンポジウムは聴衆820名という、調べた限りでは一会場での過去最高記録となりました。

懇親会では、同門会員の御令嬢でプロピアニスト石黒由佳さんたちのピアノと弦楽器の演奏や北大血液内科作成ショートムービーで盛り上がりました。想定の2倍の350名超の参加があり、急遽会場を広げ、料理追加発注を2

回行いましたが、それでも足りないほどの盛況ぶりで、主催者としてうれしい限りでした。

5. 最終日

2月3日、最終日に入りました。時に陽が差す爽やかな冬の朝で、天気最後まで持ちこたえてくれました。会場には最後まで聴衆が減ることはありませんでした。総会終了後の市民公開講座は後藤秀樹君が中心となり企画してくれました。ここでも雪だるまをあしらったポスターを作製し、1か月間、地下鉄、路面電車に掲示しました。参加者は360名超で満席、立ち見、大変に好評でした。

そして、この3日間、いや3年間の最終章である、スタッフ打ち上げの時を迎えました。医局員、看護師さん、研修医、学生、コングレストッフら50名、他にも原田実根先生ご夫妻、虎ノ門病院谷口修一部長ご夫妻、中尾眞二教授、長藤宏司久留米大学教授、九州大学加藤光次先生らが駆け付けてくれました。圧巻は長谷川祐太君が中心になって作成してくれた「学会打ち上げ」ビデオの上映でした。学会の合間に撮影、編集してくれました。皆、それぞれの想いで見入っている姿が印象的でした。笑顔、笑顔、感極まって潤むスタッフたち。お祝いのケーキや花束も頂きました。そしてすべては終わりました。

本総会参加者は約3000名であり、演題数、オープニング参加者数、会長シンポジウム参加者数、市民公開講座参加者数、懇親会参加者数、と過去最高規模でありました。これは、本学会総会において、一本筋の通った信念を、テーマ、ポスターで可視化し、その意志を汲み取ったスタッフ全員が一丸となってチームを結成し、決してぶれることなく企画、運営することができました賜物です。スタッフ全員がこれを肌で感じ、組織とはどういうものか理解し、将来の人生に生きるよい経験になったのではないのでしょうか。このチームの細かな気配りを、多くの参加者に届いたようです。「細かな工夫や気配りが感じられ、内容も充実した素晴らしい学会でした」と、多くの方々が同じ感想を口にされていました。完璧な「チームてっしー」でした。皆さん、本当にありがとうございました。

第40回 日本造血細胞移植学会総会

The 40th Annual Meeting of the Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

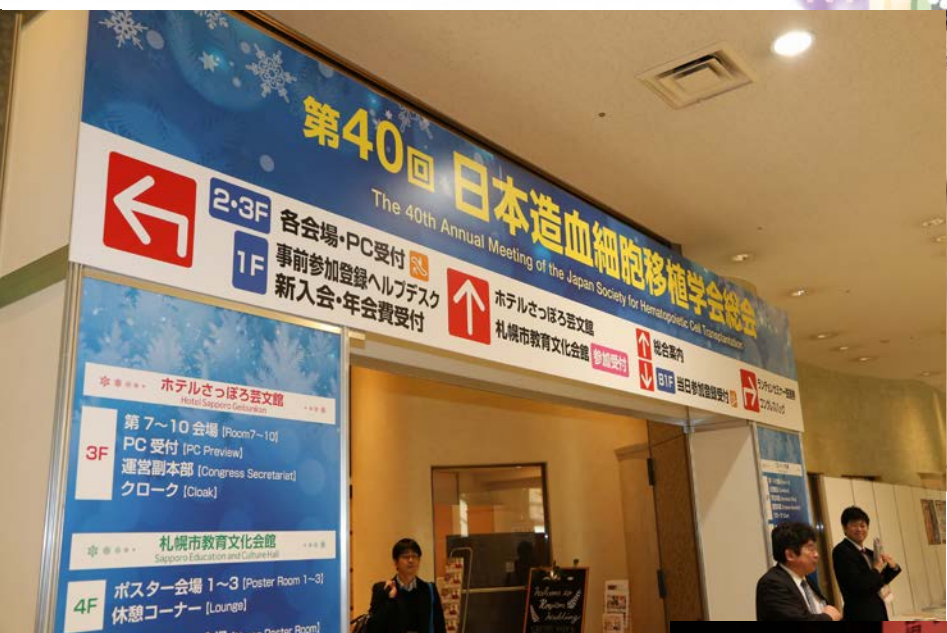
2018年 2月1日(木)・3日(土)

会場 ロイトン札幌
ホテルさっぽろ芸文館
札幌市教育文化会館

会長 豊嶋 崇徳
北海道大学大学院医学研究院
血液内科

未来の造血細胞移植
The Future of Hematopoietic Stem Cell Transplantation

<http://www.congre.co.jp/jshct40>



2月2日(金)12:40 第一会場(ロイトン3F)
Opening Ceremony
開会式のご案内

第40回総会大会長
豊嶋先生からOpening Message



山口太鼓流
北海若衆太
和太鼓スペシャル
パフォーマンス!

記念オリジナル
ビデオ上映
~移植の歴史を振り返る~
SPECIAL Mini-Movie
by 北大血内
雪道を歩くコツ 教えます!



第40回 日本造血細胞移植学会総会
The 40th Annual Meeting of the Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation





懇親会のご案内 JSHCT2018 Gala Dinner

2月2日(金) 19:40~21:00

会場： ロイトン札幌 ロイトンホールA (3F)

- 特別クラシック生演奏 -

北海道を拠点に活躍
されている演奏家による
生演奏をお楽しみください

ピアノ： 石黒由佳 様
ヴァイオリン： 岡部亜希子 様
チェロ： 中島杏子 様



北大血液内科ショートムービー
医局員が一生懸命作成した
ビデオをお楽しみください!



皆様のご参加を心よりお待ちしております。



市民公開講座

血液がんの治療をのりこえる

参加費
無料



「血液がん」の治療（抗がん剤、放射線、移植治療など）における様々な副作用は、別に日常生活に重大な支障を及ぼすことがあります。病気は良くなったけど、こんなに辛いなんて…。そんな気持ちになる方も実際には多くいらっしゃいます。この市民公開講座では、そうしたつらい症状の中でも、特に「脱毛」や「皮膚の痛み」、「味覚障害」、「吐き気」、「下痢」などといった症状に焦点をあて、その対応方法について少しでも情報共有していきたいと思っております。実際に治療を受けている患者さんだけでなく、ご家族、友人、医療関係者、さらには本内容に興味のある全ての方のご参加をお待ちしています。

日時 2018年2月3日(土)
14:40~16:20

会場 札幌市教育文化会館
小ホール
(事前申し込みの必要はありません。)
当日、直接会場にお越し下さい

プログラム

- 1 血液がんについて (医師から)
- 2 実際に治療を受けた患者さんからの話し
カバーメイクについて
皮膚の色の変化、髪の毛が抜けるなどといった
副作用への対応方法
- 3 治療を通じての食事・栄養について
抗がん剤、放射線治療で食べられない時の対応方法
(栄養補助食品等の試食・試飲も体験できます)



「北大
血液内科」
JSHCT2018打ち上げ動画
~三日目 (2/3)~